

P-100

障がい児・医療的ケア児を自宅で療育している母親の療育の状況に関する調査 ―療育の状況と共依存傾向に焦点をあてて―

生田まちよ、葛山加也子、菊池 洋子

純真学園大学 保健医療学部 看護学科

【目的】障がい児や医療的ケア児の在宅での療育介護は負担が大きい。しかし、児のケアを第三者に委譲できず療育をひとりで抱え込む母親が少なからず存在する。本研究の目的は障がい児や医療的ケア児の療育の状況と共依存傾向について明らかにすることである。

【研究方法】障がい児や医療的ケア児を在宅で療育する母親に、無記名式質問紙調査を行った。療育の状態(児および母親の年齢、在宅期間、児の重症度や介護状況を把握するため超重症児判定スコア、西村の家族介護者ソーシャルサポート尺度など)と共依存のスクリーニングテストである清水のASTWA (Addiction Screening test for Wives Alcoholics) を作成者の許可を得て障がい児の母親に対応できるように文言を修正して使用した。記述統計及びASTAWでの共依存傾向が「無いか弱い群と強い群」と「強い・非常に強い群」で療育の状況を χ^2 検定とunpaired t 検定で分析した。分析はエクセル統計2024を使用した。

【倫理的配慮】所属機関の倫理審査で承認を得た(倫理24-02)。

【結果】回収率は42/108 (38.9%)、有効回答率は、37/42 (88.1%) であった。児の年齢は 10.84 ± 8.6 歳、母親の年齢は 43.5 ± 8.5 歳、在宅療養期間は、 9.78 ± 8.6 年、準超重症児以上が22名 (59.4%) であった。「介護上頼りにする人がいない」母親は4名 (10.8%)、「家族との時間はとれている・まあとれている」が24名 (64.8%)、「他者に児を預けてよく外出する・時々外出する」は26名 (70.2%)、睡眠時間が「3～5時間未満」が16名 (43.2%) であった。家族介護者ソーシャルサポート尺度のなかで医療従事者の支援の点数は 16.2 ± 5.2 であった。ASTAWの共依存傾向は、「共依存傾向がないか弱い群」は22名、「強い/非常に強い群」は15名であった。共依存傾向の2群での療育の状況の中で有意な差があったのは、「休息時間ができている/まあできている」であった ($p < 0.05$)。

【考察】対象は準超重症児から超重症児が多くを占め、医療的ケアや症状を判断し対応していくことが必要な負担の大きい母親であった。睡眠時間も短く、医療者によるサポートもそれほど高い値ではなかった。共依存傾向の比較で療養状況の中では休息に関してのみ有意差があった。本調査では分析対象が少ない状況であったが、今後共依存傾向との関連因子を抽出し、ひとりで療育を抱え込む母親への支援につなげていけるように検討していく必要がある。

P-101

「NICU病棟退院児の家族会」試行の実践報告

笠井由美子¹⁾、上出 香波²⁾、永田 智子¹⁾¹⁾川崎市立看護大学 看護学部、²⁾駒沢女子短期大学 保育科

< (全角) 目的 > (全角)

NICU病棟退院児の家族への社会的処方を目指し家族会を立ち上げた。本研究では、参加した理由や感想を明らかにし、エンパワーメント可能な家族会運営の示唆を得ることである。

< (全角) 方法 > (全角)

1) 家族会の実践方法 対象：NICU病棟退院児をもつ家族とし、近隣の保健所や病院、子育て関連施設にチラシを配布し参加を募った。また、毎回の活動をSNSで広報した。期間：2024年9月～2025年2月(毎月1回、10時～12時)。内容：絵本の読み聞かせ・ふれあい遊び・母親同士の話し合いと、その月のテーマ(ベビーマッサージ、ゲーム、工作等)を組み合わせた。

2) 分析：事前申込の属性調査と、参加後の無記名オンライン質問紙調査の集計を実施した。

3) 倫理的配慮：所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した(24-J009)。

< (全角) 結果 > (全角)

参加人数は計13組、延べ23組だった。初回参加時の子どもの年齢は6か月未満1名、6か月～1歳未満が5名、1歳～2歳が6名、2歳～3歳1名で、低出生体重児10名、ダウン症児3名だった。事前申込みでは、11名が子育てに気がかりがあると回答していた。初回参加者13名のうち10名から回答を得た(回答率76.9%)。子どもの生活状況は、「これまで数回(1～5回)、子どもの集まりに参加」4名、「毎週1回程度、子どもの集まりに参加」3名、「今回は初めての子どもの集まりに参加」1名等回答であった。参加理由は(複数回答)、「同じような境遇の家族と交流できると思ったから」8名、「子どもが楽しめそうな活動だったから」5名、「子どもに関する気がかりが解消できと思ったから」5名、「子育てに関する情報が得られると思ったから」4名であった。参加の満足度は、「満足」70%で、「子どもも自分も楽しい時間が過ごせたから」、「少人数で、NICU卒業生の共通点があるので居心地が良かった」、「親へも関心も寄せてくれたから」といった意見があった。「やや満足」「どちらともいえない」は30%で、「同じ悩みの相談などお母さんとの交流がもっとできるとありがたかった」といった意見があった。

< (全角) 考察 > (全角)

家族会の参加理由や満足度は、気がかりを解消するだけでなく、親子が楽しめる活動かも影響していた。今後の課題は、子育ての仲間を得て支え合い自信を高め、子どもと向き合う余裕が高まるような活動内容や体制を精選させることと、集客数を増やすための広報活動である。